MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．８．３０　発行元
第 391 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

中・高校生にお薦めの本その19

中学生、高校生にお薦めするミステリ本の紹介の１９回目。今回は少し昔の作品を取り上げてみようと考えた。若い人達に馴染みはなくとも、ミステリとしての名作は過去にもたくさん存在するのである。

ミステリの王道を歩んでほしい

若い人に身近なのは最近話題の作家・作品だろうと思うけれども、私としては、「ミステリの王道」とも言うべき道筋を辿ってほしいという願いもある。小学生くらいでシャーロック・ホームズを読み始めて、その後エラリー・クイーンやアガサ・クリスティに進み…。日本の作家で言うと江戸川乱歩や横溝正史を読み…。

今のライト文芸ミステリやキャラクター小説からミステリの世界に踏み込んだ読者が「本当にミステリ好きと言えるか？」と問われれば、１００％イエスではないと思うのだ。将来的にもミステリを読み続けてもらうには、どうしても「ミステリとしての面白さ」を見つけてもらう必要がある。

今回ここに取り上げた作品は「ミステリの本質」に繋がる要素を持っているものである。不可思議な「謎」の設定や解決に結びつく論理性、結末の意外性などが用意されている。小説としてのミステリが作られ続け、読まれ続けていってほしい。

辻真先『犬墓島』

１９８４年光文社文庫。『迷犬ルパン・シリーズ』の書下ろしスペシャル版第一作。今もこの版しかないようだが、古書市場にはそれなりに出回っているようだ。

題名を見てわかるように横溝正史の『獄門島』『八つ墓村』『犬神家』を下敷きにした作り。パロディというか…。瀬戸内海に浮かぶ「犬墓島」に警視庁捜査一課の朝日正義とその飼い犬・迷犬ルパンが渡った時に起こった事件。横溝ミステリのあれこれだけでなく、辻真先の作品に登場する名探偵が続々登場するサービス精神に溢れた作品。ミステリをある程度読み込んだ後で楽しめる作りになっている。辻真先らしいユーモアに満ちていて楽しい。

北原尚彦『ホームズ連盟の事件簿』

２０１４年祥伝社。シャーロック・ホームズのパスティーシュ本。ホームズ物語を一通り読み終えた人にお薦めの作品。ホームズは一瞬しか登場しないが、その脇役たちが独力で事件の解決に向けて大活躍するストーリー。第一話の『ケンジントン診療所の怪』はワトソン博士が、自室への侵入者を突き止める事件。以下、ハドソン夫人、レストレイド警部、バスカヴィル卿、イレギュラーズのウィギンズ少年、アイリーン・アドラーと続いていく。ホームズ物語を受けての作品になっているので、正典をよく理解しているほど楽しむことができる。作者の北原尚彦は正典の特徴を踏まえ、上手な物語作りをしている。

近藤史恵『ねむりねずみ』

１９９４年東京創元社の『黄金の１３』シリーズの一冊。現在は創元推理文庫に収められている。

歌舞伎だらけの物語。失語症になりかけた歌舞伎役者夫婦のやりとりから幕が上がる。そして劇場内で起きた殺人事件へと話が進む。昼の部の途中で一階花道の横で腹部を刺されて倒れている女性が発見された。被害者は元祇園の芸妓で現在は料亭を経営している人物。まわりに多くの人の眼があったにもかかわらず、加害者を見つけることができない。そこで登場してくるのが今泉探偵事務所の今泉文吾。でもなかなか一筋縄では解決できない。混乱…混乱。近藤史恵デビュー直後の名作。

柴田よしき『消える密室の殺人』

２００１年角川文庫。『猫探偵・正太郎シリーズ』の第二作に当たる。第一作は『柚木野山荘の惨劇』（文庫版は『ゆきの山荘…』に改題）。

突然、同居人のミステリ作家・桜川ひとみにバスケットに押し込められて旅に出る猫・正太郎。行く先は東京。そして、出版社と編集担当。訳が分からないうちに同居人が抱える騒動に巻き込まれるパターン。動物連れで宿泊場所は…。正太郎は出版社の建物の裏にある日本庭園の中のプレハブ小屋でたくさんの猫（映像関係に出演する猫）たちと一緒に過ごすことになる。ところが、足跡が残っていない小屋なのに、猫にアビシニアン一匹と人間一人が青酸カリで毒殺された形で発見される。衆人環視の簡易トイレの中。またまた密室殺人事件に遭遇。正太郎は、殺猫事件の謎を解こうと他の猫たちの協力を得て活動を開始する。章の区切りに猫の足跡マークが使われていて、正太郎は捜査員にも犯人のヒントを伝えようと努力していく。本格謎解きミステリとしてよく考えられている。